

稲作



高品質米の収量増加に向け

『稲は地力でとる』といわれるように、昔から堆厩肥の施用による地力の増強は、稲作の基本でした。現在では、土壌の養分条件(土壌分析で確認)によって、ケイ酸やリン酸を土壌改良材として施用しています。特に秋起こしは、翌年の雑草・病虫害の抑制などに効果があり、畦畔除草は越冬害虫の発生密度を低下させます。

〈水稲の作況(9月15日時点)〉

東北農政局秋田地域センターが公表した、コメの作柄概況によると、秋田県内の作況指数は前年同期比1ポイント減の99の「平年並み」でした。ただ16日の台風18号による冠水などの被害があったことから、10月下旬公表予定の作況指数に影響する可能性があると思われまます。6月の干ばつや7月の日照不足などの影響で、全もみ数は「やや少ない」となりましたが、8月以降は平年を上回る気温で生育が進んだことから、予想収量が平年並みとなりました。ただし、長雨により田面の柔らかい圃場が

多いため、倒伏程度が大きい圃場も確認されており、最高分げつ期後に茎数が増えた影響で、有効茎歩合は平年よりもやや低下しています。

〈天候不順等に強い稲作り〉

天候不順に強い体質を持つ稲に



◆けい酸のはたらき◆

けい酸は、稲の葉や茎などの表面にけい化細胞を形成し、稲体を丈夫にするので次のような効果が期待できます。特に、速効性けい酸は稲の生育初期から吸収され、りん酸の吸収促進と根のはりを旺盛にします。



育てるためには、まず過繁茂とせず、適正な穂数と粒数となるよう制御する必要があります。また根の活力を、生育後半まで維持することが重要となりますので、土壌の地力向上に向け、有機物や土壌改良剤(バラ散布)の施用が効果的です。

営農行事案内

肥料・農薬勉強会を
28日・29日に開催!



肥料・農薬の適正使用を説明するため、10月28日と29日の2日間にわたり、肥料・農薬勉強会を開催します。低温・高温障害への対応や、除草剤の散布時期などについて、JAやメーカー担当者が説明・相談を行います。なお、26年度用の肥料・農薬予約注文は、10月末となっておりますので、ご注意ください。